# 被害者としての思い

４０歳　女性

今でも私にはその瞬間の記憶はありません。

いつも通りの時間に、いつもの道を通って会社に行っていました。会社まであと５分の横断歩道に来たときでした。

その横断歩道がある交差点は、信号無視をする車がいるので、私は、そこを渡るときには確実に青信号になったのを確認して渡っていました。その日もいつものように青信号に変わったのを確認して足を踏み出しました。

次に気がついたのは病院で、頭上で医師が指示をしている声でした。

そこで、「どうやら車に轢かれたらしい。」と思いました。

加害者は高齢の男性で、運転は得意ではなく、信号を見る余裕すらない状態で運転していたそうです。

事故を起こしてすぐは、太陽が眩しくて信号が見えなかったと嘘を言っていたとも聞きました。また、救護の措置も全く取らず、警察や消防への連絡は、たまたま居合わせた上司達がしてくれたとのことでした。

事故の概要は、赤信号に気付かず突っ込んできた車が、私にぶつかった事でようやく気付き、少し進んだ所で停車。車の先端が私に当たり、そのままボンネット上に乗り上げ、フロントガラスに強く頭を打ってそのまま落下したとのことでした。

この事故による当初の診断結果は、骨盤と恥骨の骨折、くも膜下出血の怪我ということでした。しかしその後、耳の聞こえが悪く、再度診てもらったところ、耳の下の骨折が判明しました。

このことが原因でストレスによる円形脱毛症にもなり、更に、嗅覚がほとんどなくなった事も分かりました。

入院してすぐは、骨折部分の痛みで体を動かす事が出来ず、また、ひどい頭痛もあり、痛み止めを飲んでも痛みで眠れない程でした。

もちろん入浴など出来ず、フロントガラスで頭を打っていた事もあり、枕は赤いフケでいっぱいになりました。

骨折は、痛みがあってもリハビリをして、時間が経てば治るという確信があったので、

それほど辛い事とは感じませんでした。

くも膜下出血については、ほぼ出血が消えたと言われましたが、通常と違う頭痛を感じたらすぐ病院に来るように言われました。今も頭痛やめまいが起こるたびに、これは危険なものかどうか不安になっています。

ただ、最もショックだったのは、嗅覚がほぼないという事実でした。完治はしないそうです。

入院中はまだ、あまり感じていませんでしたが、退院して今まで食べていた物を食べるようになって辛さが増しました。

味というのは、舌で感じる味覚と鼻で感じる風味で成り立っています。その風味がなくなったので、ほぼ何を食べているのか分からなくなりました。食欲を誘うような匂いも感じません。

私はお茶が好きで、事故の前日まで台湾にお茶を買いに行っていました。

でも、一生これを楽しむことが出来なくなりました。また、匂いがあることは分かっていても、それが良い匂いなのか、悪い匂いなのか分かりません。

更に、焦げ臭さ、ガス臭、腐敗臭なども分からないので、日常生活において危険があります。

周囲の人は、「あの事故で生きているのが奇跡だ。」と言います。「障害も目に見えるものではなくて良かった。」と言われます。これでは、匂いのない生活が辛いとは言えません。確かに、もっと酷い状態の人はいます。

しかし、私は他の人と比べられても意味がありません。

私が比べられるのは、今の私と事故前の私なのです。

退院後すぐは、障害の事実を突きつけられる食事が、嫌で嫌で拒食症寸前でした。

私は加害者には会っていません。

謝罪も直接は受けていません。

今後、受けるつもりもありません。謝罪をして楽になるのは加害者だけですから。

謝罪はいらないから元の体を返して欲しいです。

障害が残らなければ許せたでしょう。

しかし、一生残る障害を無理矢理背負わされて許す気にはなれません。

また、当初の嘘や、入院中にいきなり私の携帯電話にヘラヘラと直接電話をしてきた非常識さはあり得ないと思っています。

加害者は、保険に入っているので治療費などは保険会社が負担します。

加害者自身は、免停処分となって３０万円程度の罰金を払えば一件落着です。

被害者である私は、２か月半に及ぶ入院を余儀なくされ痛みに苦しみ、一生、好きな香りを嗅ぐこともできないのです。

また、頭を強く打っているので、「今後、障害が出ないだろうか。」との不安もずっと抱えなくてはいけません。

しかし、裁判を起こす気はありませんでした。

なぜなら、「判決は高齢者には甘い。」と聞いていたからです。人は法の下に平等ではないと思いました。

信号すらまともに見ることができない人間が、人を殺せる車に乗るのは故意犯以外の何ものでもありません。

しかし、仮に交通刑務所にしばらく入ったとしても、それで私の体が元に戻るわけでもありませんし、服役中の生活費を私達の税金でまかなう事を考えると、「冗談じゃない。」の一言です。

私は一生、加害者を恨み続けることにしました。「人を恨むより、前を向いて歩こう。」などと完全に他人事で綺麗事を言う人もいるでしょう。

でも、恨むことが支えになることもあります。

私は恨みを杖にしました。

加害者には、この世に自分を心の底から恨んでいる人間がいることを片時も忘れて欲しくありません。「一生自分のせいで他人を不幸にしてしまった。」と、後悔し続けて欲しいと思っています。

どんな楽しい一瞬も、同時に深く恨まれている一瞬なのです。

それがやってしまった事の罪の重さであり、最低限の償いです。加害者は犯罪者なのです。

交通事故は不幸の塊です。

取り返しがつかないことになるのです。

「自分だけは当事者にならない。」という保証は何もありません。

特にドライバーは、「自分だけは例外」という気持ちを捨てて、注意深い運転、時には運転しないことの選択をして欲しいと思います。